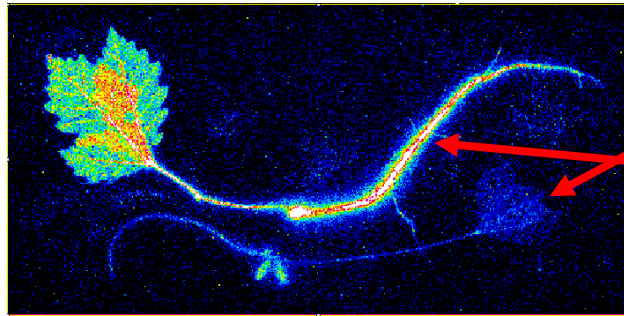


<自然の循環サイクルに組み込まれたセシウム>

写真1



分析・提供：広島大学・量子エネルギー工学研究室

写真1

2015年に採取した幼木の内部にセシウムが入り込んでいる事を現しています。

一年齢(写真下部＝新芽)より

二年齢(写真中央)にセシウムが多く取り込まれています。

写真2

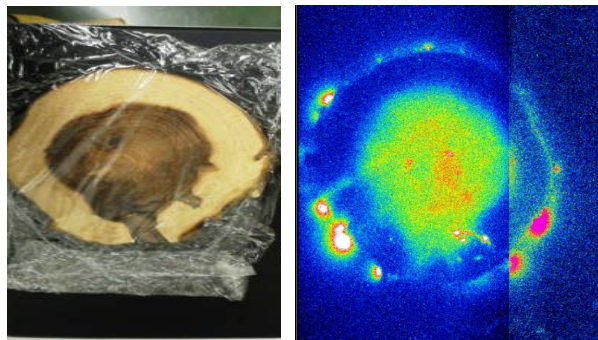
樹齢約100年の杉材。当代の所有者68歳のお父さんが生まれた時、お爺さんが植えた物だそうです。杉材の芯部にセシウムが入っています。

(樹高約15m。2016年1月伐採。同年2月、地表10m部分の切断面を測定。)

写真1、写真2右

編集注：イメージングプレートを利用した含有放射線計測による放射能分布画像。緑色→黄色→赤色になるにつれ含有放射能(放射性セシウム)濃度が濃いことを示している。

写真2



原発事故は100年かけて育てた樹木も、これから100年、200年かけて育つ樹木も商品価値を失わしめたのです。

“土地は一生、金は一時”と言われるますが、賠償金では償えないのが原発事故です。

<猿のボスは>

6年余も無人に近い村では猪と猿の天下になっています、私が住む部落の近くを縄張りにする50～60頭の猿の群れ、最近では車で通りがかるだけでは逃げません。車を止めてドアを開けると逃げ出します。生まれたばかりの子猿が母猿の背中にしがみついて山の中に逃げ込みます。しかし、ボス猿はそれらが逃げ切るまで山に逃げ込まず人間を威嚇します。

でも人間世界では村の復興に学校が必要と、2018年度から学校再開を進める村長もいます。

甲状腺検査・保養の予定 (詳しくはいずみHP等でご案内いたします)

第39回甲状腺エコー検査	5月21日(日) 13時～17時	仙台市青葉区「エマオ」
いずみこひつじキャンプ in 山中湖	7月15日(土)～7月17日(月・祝)	共催：東京YMCA
第11回親子短期保養プログラム	8月実施予定(北海道)	

運営委員長 布田秀治(いずみ愛泉教会)

運営委員 明石義信(常磐教会) 保科 隆(福島教会)

布田秀治(いずみ愛泉教会) 最上千絵子(仙台北教会)

室長 保科 隆(福島教会)

顧問 篠原弘典(原子核工学専門家)

スタッフ 会津かよ子 笠松絹子 服部賢治

会計協力 渡辺広衛

日本キリスト教団東北教区 放射能問題支援対策室いずみ

UCCJ Tohoku District Nuclear Disaster Relief Task Force “IZUMI”
〒980-0012 仙台市青葉区錦町1丁目13-6
TEL/FAX 022-796-5272
メールアドレス izumi@tohoku.uccj.jp
ホームページ http://tohoku.uccj.jp/izumi/



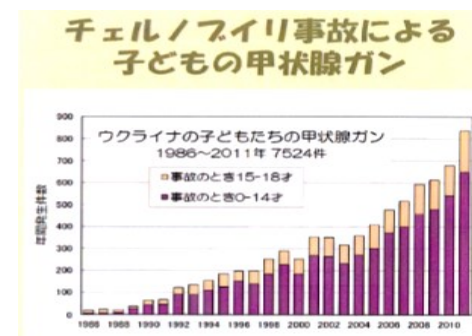
いずみ

題字 丹治正雄氏

いずみ活動、第二期に向けて

運営委員長 布田 秀治

「東北教区放射能問題支援対策室いずみ」(以下、いずみ)は2013年10月に発足しました。2017年3月末までを第一期と考えて活動してきました。皆さまからの本当に暖かいご支援のもと、思いに優る多岐にわたる活動を展開することができました。心から感謝いたします。東北教区は昨年5月の教区総会で2019年3月末までの活動継続を決議しました。これを受けて、第二期スタッフを3人に再編成し、予算を縮小しての新たな出発が始まりました。運営委員会ではできるだけ長く活動を継続したいと願っています。



さて、今私たちが置かれている状況は下記に示しますように、非常に厳しい局面を迎えています。まず、子どもたちの甲状腺検査ですが、国や福島県はできるだけ縮小の方向に持っていきたいようです。今年2月9日、読売新聞社説に「放射線審議会民主党政権時の基準を見直せ」が載りました。この中で、「科学的には100ミリシーベルト以下の被ばくによる健康への影響はないとされる」とし、「年間1ミリシーベルトの線量限度、食品・飲料水や除染の基準を緩めるよう」という内容でした。また、昨年7月には福島県小児科医会で「検査や見つ

かったがんの治療の在り方を再検討する必要がある」との声明を採択。「健康に対する不安の増大。過剰な検査に問題があるので、縮小を」福島県に要望していく内容でした。

上記のグラフで分かりますようにこれからこそ大切な働きです。いずみはこれからも甲状腺検査が必要との立場で検査を継続していきます。

次に、福島原発事故に伴って避難指示が出されていた福島県の飯舘村、川俣町山木屋地区、浪江町が3月31日に、富岡町が4月1日に避難指示解除されました(帰還困難区域除く)。それと同時に、避難指示区域外(自主)避難者への住宅支援も打ち切られました。マスコミでは喜びの声・顔が取り上げられていました。3月21日、国会における東日本大震災復興特別委員会で参議院議員の山本太郎さんが「放射性物質による健康被害対策」について質問しています。茨城県東海村の「ジェー・シー・オー東海事業所」で「1999年9月30日に臨界事故が起ったことを受けて、茨城県はレベル4の事故とし、追加被ばく線量1ミリシーベルトでがん検診付きの健康診断を一生無料にしました。福島原発事故はレベル7です。それにもかかわらず、20ミリシーベルト以下であれば問題ないとしているのはあまりにも違いすぎませんか」と。まことに的を射た質問でした。

このような厳しい状況の中で、いずみの働きはますます大切な活動となるでしょう。責任の重さを痛感しています。スタッフ3人でできることに精一杯取り組んでいきます。皆さんのご支援がなければ続けることができません。これからも変わることなくいずみのご支援をお願いします。

2017年3月31日、日本政府により避難指示が解除された【福島県飯舘村の現状】について、福島県飯舘村住民の伊藤延由さんにご寄稿いただきました。

伊藤延由(いとうのぶよし)さんプロフィール

1943年11月生まれ、73才。震災発生の前年より、飯舘村「いいたてふぁーむ」に管理人兼農民として入植。近隣住民との助け合いが息づく村落コミュニティの中で生活を送っていた矢先、2011年の東京電力福島第一原発事故による夥しい放射能汚染のため避難を余儀なくされる。現在は福島市内の仮設住宅と飯舘村を行き来しながら、飯舘村の山菜や木材などの環境放射能測定を続けている。

「原発事故で失ったもの（飯舘村からの報告）」2017年4月 伊藤 延由

＜飯舘村は美しい村＞

面積230km²(東京なら300万人が住む面積)に人口6,200人、1,700世帯、三世代同居が35%ほどの農林業が主体の村でした(震災発生当時)。四季折々の自然の恵みが食卓を賑わしていた、山菜は塩蔵し年間を通して食卓に供されていた。食費の40%は自然の恵みだったね、とお年寄りが話しています。福島第一原発とは30km圏内に数軒ある程度です。

私は2.2haの稲作に挑戦していましたが、村のご近所の方々に支えていただき、初めてだったにもかかわらず、2010年秋、反6俵もの収穫をえられることができました。原発事故によって、このような生活環境一切が奪い去られました。

＜放射能の知識は＞

原発事故直後の3月15日、飯舘村役場に設置されたモニタリングポスト(MP)値が44.7μSv/hを記録したと聞いても“それは何?”という程度の知識でした(もっともこの数値は村長が村民には知らせるなと口止めされ知らされたのは後日)。

＜避難指示と解除＞

2011年4月22日、国は年間被ばく量が20mSvを超えるので計画的避難区域に指定すると突然の指示。一ヶ月以内に村外へ避難するようにと。6月末から7月上旬に完了した避難先の仮設住宅や民間の貸家(見なし仮設)は村の自宅とは違い狭隘で世帯分離して避難生活が始まったのです。

翌年、年間被ばく量が50mSv以上の地域を帰還困難区域、20mSv以上(50mSv未満)を居住制限区域、20mSv未満が避難指示解除準備区域に指定されました。

そして今年3月31日に帰還困難区域を除き避難指示を解除しました。

しかし、戻りたいと思う村は3・11前の村ではありません。現在戻ると言う方は高齢者が主で、三世代が助け合って生活してきた村ではないのです。

＜飯舘村の現状＞

避難指示解除の条件は、除染が終った事、生活インフラ整備が終った事、積算被ばく線量が20mSv/年を下回る事です。

飯舘村では除染は終わっていません。230万個とも250万個とも言われる、除染で出た放射性物質を詰めたフレコンバッグが村内のいたる所にうず高く積み上げられています。何時搬出されるかさえ示されないままです。

生活インフラは医療機関が週二日午前中のみ開かれ、投薬は隣町で受ける。介護に関しては、特養は職員確保が出来ず新規入所は困難、デイサービスやショートステイは村外の業者に依存する。

おそらく帰還する方の多くはお年寄りだと思われるが、車が無ければ生活が出来ない村、通院バス、お買い物バス、移動販売車などの行政サービスは皆無。広い村に点在する住宅、帰還したお年寄りの安否確認は？生きるための最低条件さえも満たされていない。

なぜ、飯舘村などの被災地域に限り、年間積算線量20mSvまでの被ばくが良しとされるのか？20mSv/年以上で避難したのでその値を下回ったから避難指示解除という乱暴な条件、事故前の公衆の年間被ばく量1mSvなど意にも介さない不法なもの。

＜村の放射能環境は＞

除染済の村内の空間線量率(1m)は0.15μSv/h～1.5μSv/h程度。村内に設置されたモニタリングポスト値の中には1.0μSv/hを超えるのも少なくない。

セシウム134が事故当初の約1/8に低下したが、残るセシウム137の半減期は約30年。そう簡単には低下しないし、未除染の山林原野は2.0μSv/hを超す場所が多い。

村民が帰還するという事は終の棲家だ、それに放射能の感受性が大人の20倍と言われる子どもたちも例外ではない。

＜自然の恵みは＞

私は事故後六年間、飯舘村の自然が帯びた放射能を測ってきました。特に飯舘村の豊かさの一つ自然の恵みを中心に。

(以下、山菜、茸とも、全て飯舘村内、ほぼ同地点での経年採取物の測定結果。)

■山菜の場合(単位はBq/kg)

種目	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	備考
ふきのとう		2,483	319	201	108	野手神
〃				143	201	沼平
山ウド	81	72	103	62	7	
タラの芽		320	779	295	793	
コシアブラ			35,593	270,283	61,727	
ワラビ		1,503	269	3,047	916	
ミズフキ		446	452	410	399	
ハチク		3,642	797	512	307	
コゴミ		197	6,004	3,481	1,587	
シドキ		158	515	1,984	242	
ハワサビ		533	432	81		

国の基準値100Bq/kgを下回る物がありますが、土壌のセシウム濃度と比例しないもの、前年値を上回るもの、アップダウンを年々繰り返すもの、品種によって移行率が全く異なる等、測ったもの以外は食べられない。

■茸の場合(単位はBq/kg)

種目	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年
チチタケ		76,000	500			
松茸	866	3,590	3,032	7,244	5,410～29,000	3,493～14,464
猪鼻茸	44,300	48,800	27,940	72,000	44,460	3,820～10,873
アカタケ			14,018			31,634
天然椎茸			98,839			
モミタケ						6,185
舞茸						1,750

約60年前の大気圏内核実験や31年前のチェルノブイリ事故由来によるセシウムが残っていますが、福島第一原発からまき散らされたセシウムによる人体への影響が無くなるには100年、200年もかかるのでは。(次頁につづく)